

Madiniya. Newsletter 38 (1991.2.15)

日班「比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究」(代表者:黒田壽郎)

開催日:1991年1月26日(土)

於:国際大学東京事務所

報告者:稲賀繁美(三重大学人文学部助教授)

「19世紀フランス絵画におけるオリエンタリズム」

中牧弘允(国立民族学博物館助教授)

「都市におけるアマゾンの幻覚宗教」

出席者:鈴木規夫(成蹊大学)、大塚和夫(国立民族学博物館)、赤堀雅幸(東京大学)、鎌田繁、竹下政孝(東京大学)、前田成文(京都大学東南アジア研究センター)、黒田壽郎(国際大学中東研究所)、黒田美代子(国際大学中東研究所)

-12-

1. 東方趣味と日本趣味

稲賀氏は19世紀のヨーロッパ絵画における他者表象の問題を主題として、多くのスライドを用いながら、西欧絵画が中東世界をどのように表象してきたかについて論評を加えた。第1期のロマン主義時代(ネロ、ドラクロワ、アングル)の美的オリエンタリズム、第2期のレアリズムの時代(ヴェルネー、フロマンタン、ギョメ)における植民地オリエンタリズムの成立、第3期(ジェローム、ルノワール、マネ、ゴーギャン、ベルナル)におけるオリエンタリズム絵画の壘産による植民地絵画への移行と、解釈は3つの時期に分割された単位で行なわれた。絵画表現は、基本的に他の諸表現、とりわけ言語表現と質的な相違があるが、表象の対象、表象の技術を媒介として“見るもの”と“見られるもの”との対応関係、ひずみ、ねじれ、が明確に指摘された。これはまさに西欧による中東に関する言説のひずみ、ねじれの構造と軌を一にする面があって興味深かった。

2. 都市におけるアマゾンの幻覚宗教

中牧氏はアマゾンの都市部における幻覚宗教の文化人類学的紹介を行ない、同時に幻覚剤の使用を基本とするきわめて個別的色彩の強烈な

新型宗教の、現代的意義を強調した。情報化社会において幻覚剤の作用は、産業化時代の体制や価値観をアウトフーベンする一つの可能性をひめているという基本的発想の中で、大量生産から多品種小量生産へ、普遍主義から個別主義への経済的、文化的移行の中で幻覚宗教の役割が肯定され、その結果としてイスラームからサントダイミの宗教への傾きの重要性が主張された。

ただレイスラームには、同様にスーフイズムに代表されるような「幻覚」的と要約はされえないが個的体験を介して超意識の世界に迫る要素があり、またイスラームの普遍性は根底に強度な差異性への志向が存在する点はどう捉えられるであろうか。

二つの研究発表は、中東に対する具体的な異文化の実例を中東的なものに衝突させるというかたちで、中東研究のための視点確立に役立てるためのものであった。しかしEntrechoquerの方法が有意義に結実するためには、あとう限り多くの共通項の共有と、観察者の中東地域への視点への若干の踏み込みを要求するようである。

(文責:黒田壽郎)